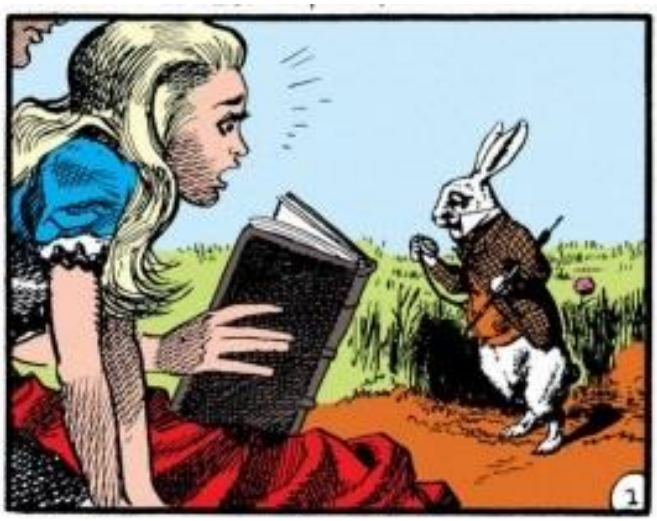
古典部門：……さて！　ＭＡＤ誌のおばかな読書でもうひとつ読む覚悟はできているかな？　よし！　引き続き古典作品をぶちこわすために、今回はみんなの心の中でずっと大切にしているお話に目を向けよう。あなたの前にＭＡＤ版を披露するのは、あの風変わりで楽しい名作**『不思議の国のアリス』！**

お姉さんのそばに座っていて何もすることがないとアリスはつまらなくなってきました。お姉さんが読んでいる本をのぞいてみたんですけど、絵がひとつもなくて…

…とそのとき、白ウサギがわきを駆けぬけたんです。それは別にどうということはなかったんですけど、ウサギがベストのポケットから懐中時計を取り出したとなると、アリスはじっとしていられず…



ジャック・デイヴィス作

興味津々でアリスは野原を走っていき、ちょうどウサギがウサギ穴に飛びこんだところを目にして、そのあとを追い…

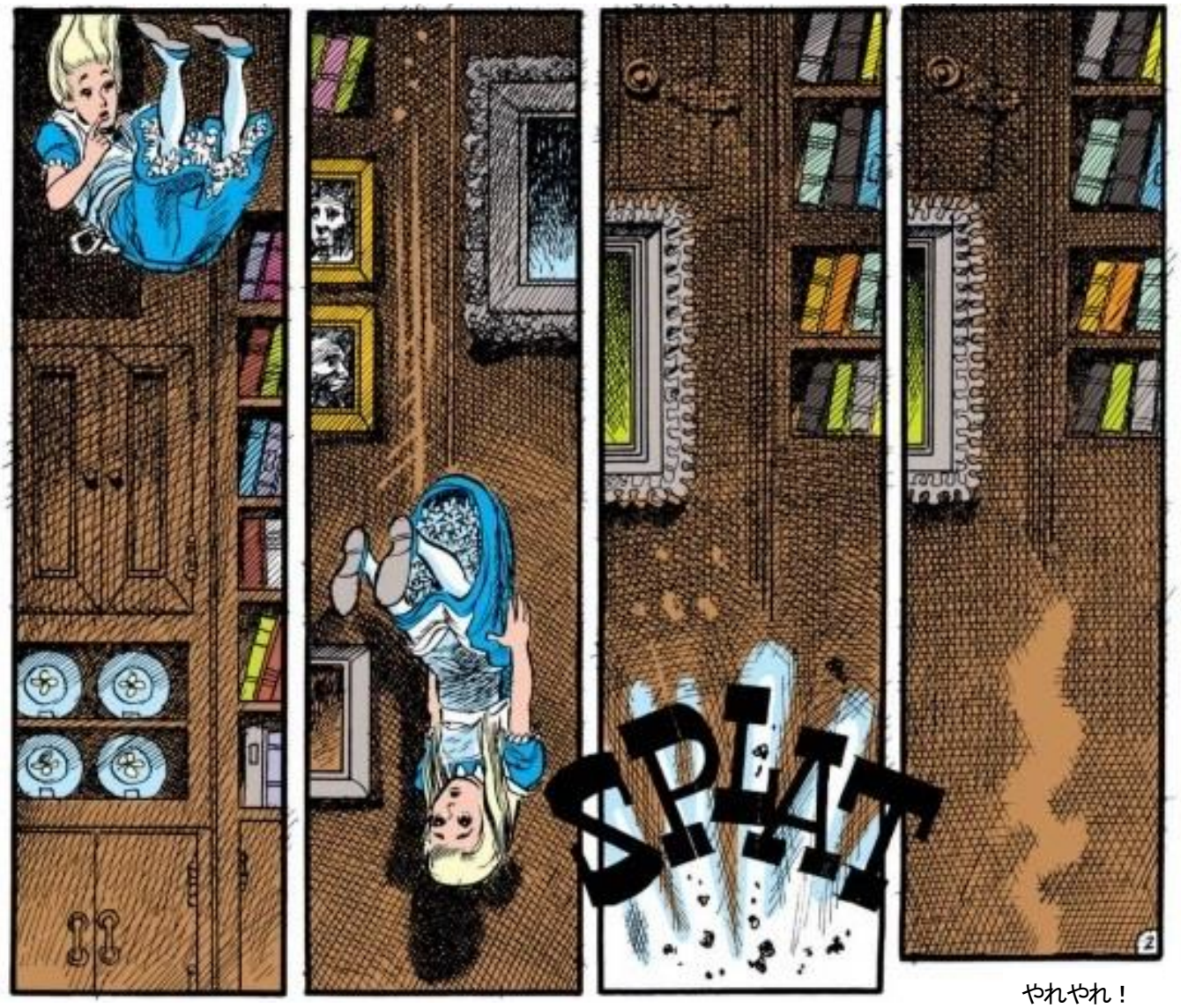
ウサギ穴はトンネルのようにまっすぐ伸びていたんですけど、急にかくんと下向きになって、アリスが気づくと…

…とても深い井戸のようなところを落下していました。下のほうがどうなっているか見ようとしましたが、暗すぎて見えないんです！

まわりの壁には食器棚や本棚がいっぱいありました。

どんどん落ちていきます。「いったい何マイル落ちちゃったの！」とつぶやいたちょうどそのとき…

…どしん！　ぐしゃ！小枝の山の上にアリスは落ちて、落下は止まりました。



やれやれ！

…いやまあ…そんなもんでしょう！…それでは、次の冒険に進みましょう…『鏡の国のアリス』です！　アリスは大きな肘掛け椅子の片隅に体を丸めて座っていました…

「鏡の中のお部屋に入っていけたらいいのにな」とアリス…「鏡がガーゼみたいに柔らかくなっちゃうことにするの」そう言いながらアリスはマントルピースの上にあがりました…

…どうやって上がったかアリスはさっぱり分かりませんでしたが、鏡は銀色に輝く霧のように溶けはじめたのです！　次の瞬間、アリスは鏡を突き破って…

おやまあ！　ごっこ遊びが実害をもたらすことも確かにあるんです！　まったくいまいましい鏡は…粉々に砕けてしまいました！　アリスがまわりを見回すと…

…あのウサギが急いで走り去るところでした。アリスはウサギが何か言っているのを耳にしました。『ドタノ』と言ってたみたいです。

広間の先に戸口が見え、そこに飛びこんだウサギに、アリスは追いせまりました。

でもドアは高さが 15 インチしかなく、壁はアリスの頭より固かったので、追っていくことができなかったのです！

唐突に、アリスは固いガラスのテーブルの前にいました。その上には小さな金色のキーが置いてあり、キーのわきには小さな壜があって『わたしを飲んで』と書かれていました。

小さなドアを開けても役に立ちそうもないので、アリスは壜のほうを選び、中身を飲みほしました。「変な感じ！　きっと体が望遠鏡みたいに縮んでいるんだ！」とアリス。

今度は、身長はＯＫ…ドアもＯＫ…アリスはキーを取りに行きました…でも**アリス**が小さすぎ！

それで『わたしを食べて』と言っているケーキでまた大きくなりました…キーを取ってＯＫ…ドアのところに行って…でも**アリス**が大きすぎ！

…また『わたしを飲んで』の壜から飲んで…身長ＯＫ…ドアＯＫ…キーを取りに行くと…**アリス**が小さすぎ！

…ケーキを食べて…キーＯＫ…テーブルＯＫ…身長ＯＫ…でもドアが大きすぎ！

…また壜から飲んで…キーＯＫ…身長ＯＫ…ドアＯＫ…でも**部屋**が小さすぎ！

…またケーキを食べて…ドアＯＫ…身長ＯＫ…テーブルＯＫ…でも**キー**が大きすぎ。

…壜…キーＯＫ…ドアＯＫ…身長ＯＫ…テーブルＯＫ…でも**絵**が小さすぎ！

この手間がばかばかしくなってきました。それでアリスは管理人を呼んでマスターキーで外に出してもらいました！　外には三月ウサギといかれ帽子屋とねむりネズミがいました。

「席はないよ！」彼らはアリスに大声で言いました。「あらまあ、お喋り三月ウサギさん！」でもほんとうは三月ウサギは喋っていなかったのです。それはねむりネズミだったのです（彼は腹話術師でした）。※

「いいとも」帽子屋が椅子から飛び上がって言いました。「ぼくたちのお茶会に加わっていいよ！　さあ、いくさ化粧をしようぜ！」

「でもいくさ化粧は気違いお茶会とどんな関係があるの？」とアリス。「**気違い**お茶会だって？　**気違い**お茶会ってだれが言った…」

「…こいつは**ボストン**お茶会になるのさ！」と帽子屋。でも、アリスはさっきから白ウサギのほうが気になっていました。

〔訳注：ボストン茶会事件ではインディアンに変装している〕

今度こそ、アリスは白ウサギを捕まえようと心に決めました…あの不思議な言葉『ドタノ』が何を意味するか知るために！　「ドタノ…ドタノって何だったの…どったの？」…ついに分かりました！

一瞬の後に勇気は恐怖となり…狩人は狩られる側に変わりました…なぜって、前に見た映画からアリスは突然気づいたのです…**このウサギは追いかけるには危険すぎる！**〔訳注：「どったの？」はバッグス・バニーの口癖〕

兎角するうちに「裁判がはじまるぞお！」という大声が遠くで聞こえました。「行こう！」とウサギが叫びました。行く手では、王様と女王様が法廷を開いていました。

どうやらハートのジャックがタルトを盗んだようです。そして…（わけは聞かないでください）次なる場面では白ウサギが古典の名詩『ジャバーウォッキー』を読み上げます。

ジャバーウォッキー

時はじゅうじゅう　ぬるやかなるトーヴらは
*　ぐるぐるぐりぐり　ずっ地をはいずり*
なべて　ぺらぼらし　ボロゴーヴらは
*　さては　いでなるラースらのほえずり*

「わが倅　ジャバーウォックに気をつけろ！
*　咢でがぶり　鉤爪でざっくり　侮るな！*
ジャブジャブ鳥に気をつけろ
*　猛けり狂いしバンダースナッチに近寄るな！」*

ヴォーパルの剣を手にして
*　長の年月　おぞましき敵を探索し――*

かくてタムタム樹の根方に　身を休めて
*　物思いに佇むことしばし*

怒れる思いで立ちつくしていると
*　かのジャバーウォック　眼に炎を湛え*
タルジーの森より現われ出でる　ざわざわと
*　迫りくるのは　ごぼごぼと唸る声！*

一撃二撃！　一撃二撃！　一突きまた一刺しと
*　ヴォーパルの刃　深々と突き刺さる！*
息の根を止めて　生首抱えると
*　意気揚々と帰還する*

「それって詩なの？」とアリス。

「それはあなたにとって歳月を経て残ったと信じられる古典の詩なの？…

…教育的なの？　道徳を教えてくれるの？　売れるの？」とアリス。

「ジャックは有罪！」と女王が言います。「首をはねよ！」アリスが指ではじきます！　でもジャックは言います。「ＯＫです！　わたしはトランプですから、スペアの頭を持ってます！」

つまりこれが、トランプの束をアリスが指ではじいたわけです…なぜなら、アリスはずっとトランプのひとり遊びをしていて…ズルをしているのです。
「この娘の首をはねよ！」と女王が叫びます。

「あなたなんて恐くないわ」とアリス。「あなたたちはただのトランプじゃない！」こう言ったとたん、すべてのトランプが空中に舞い上がり、アリスに降りかかってきました！

アリスはそれを振り払おうとして、自分がお姉さんといっしょに川岸にいるのに気づきました。お姉さんは、アリスの顔にかかった枯葉をやさしく払いのけていました。

「起きなさい、アリスちゃん！」お姉さんは言いました。「夢を見ていたのよ！」「えっ？」とアリス。「お決まりの夢落ちなの？」

「何てこと！　冒険は夢でしたで終わる古くさいやり方は、史上最低の陳腐な筋立てよ！」

そうして、アリスはお姉さんに、自分が見たおかしな夢を、思い出せるかぎり話したのです…

…そしてアリスの話が終わると、お姉さんは言いました。「確かにおかしな夢ね」そうして、アリスを精神分析医のところに連れていきました。